

# 里 芋

担当者 技師 上西 孝明

試験課題名	里芋の品種比較試験展示	
目的	和寒町での里芋生産技術の可能性を検討する。	
期待される成果	和寒町の里芋部会が栽培研究している2種類を試験展示し、地域に適応する品種の選定と栽培方法を模索する。	
連携機関	上川農業改良普及センター土別支所 和寒町里芋研究会	JA北ひびき和寒基幹支所

## 1 供試品種・資材

品種

土垂れ ・ 石川早生

## 2 耕種概要

土質 ～ 植壤土

前作 ～ 小麦

催芽日 ～ 5月10日 定植日 ～ 6月16日 収穫日 ～ 10月3日

栽植密度 ～ 畝幅135cm×株間45cm 1,660株/10a当たり

## 3 土壌診断結果と施肥量

### (1) 土壌診断結果

(mg/100g)

pH	EC	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O	MgO	CaO
5.8	0.075	38.6	53.4	41.1	226

### (2) 土改資材と堆肥 (kg/10a)

炭カル ～ 150kg 堆肥 ～ 2,000kg

### (3) 施肥内容 (kg/10a)

基肥 ～ 北の八光 100kg (4.0 - 6.0 - 2.0)

分肥 ～ N S 2 6 2 60kg (12.0 - 16.0 - 12.0)

### (4) 肥料の要素量

(kg/10a)

			N	P	K
基肥	北の八光	100kg	4.0	6.0	2.0
分肥	N S 2 6 2	60kg	7.2	9.6	7.2
合計			11.2	15.6	9.2

## 4 生育調査

### (1) ハウス栽培区

項目 品種	草丈(cm)	茎数(本)	葉数(枚)	葉の大きさ(cm)	
				たて	よこ
土垂れ	59.7	5.0	25	35.2	32.4
石川早生	67.7	4.6	22	36.3	34.0

### (2) 露地マルチ栽培区

項目 品種	草丈(cm)	茎数(本)	葉数(枚)	葉の大きさ(cm)	
				たて	よこ
土垂れ	68.4	5.0	20	36.0	33.8
石川早生	77.4	5.0	23	35.2	33.4

## 5 収量調査

### (1)ハウス栽培区

10a当たり

項目 品種	子いも		孫いも		曾孫いも		親いも		重量合 計 (kg)
	重量(kg)	割合(%)	重量(kg)	割合(%)	重量(kg)	割合(%)	重量(kg)	割合(%)	
土垂れ	572	43	132	10	26	2	598	45	1,328
石川早生	993	45	264	12	66	3	883	40	2,206

### (2)露地マルチ栽培区

10a当たり

項目 品種	子いも		孫いも		曾孫いも		親いも		重量合 計 (kg)
	重量(kg)	割合(%)	重量(kg)	割合(%)	重量(kg)	割合(%)	重量(kg)	割合(%)	
土垂れ	1,035	46	247	11	0	0	968	43	2,250
石川早生	1,152	48	312	13	0	0	936	39	2,400

## 6 生育経過

5月10日に浴光催芽をはじめ、両品種とも萌芽を促すため籾殻・籾殻くん炭の2種の苗床に芽を上に向け約2cmほど覆土、伏せ込みを行った。くん炭床の方が生育で優っていた。

両床とも多灌水により、カビの発生、過度な根の生育が観られた。根を伸ばしすぎると定植時に植え痛みが出るため、灌水量には注意が必要である。

初期生育は、石川早生が草勢で優っていた。

栽培比較では、ハウス栽培区の方が露地マルチ栽培区より生育が旺盛であった。その後、8月以降は露地マルチ栽培区の生育が旺盛となった。

## 7 収穫調査

草丈では、両品種とも露地マルチ栽培区がハウス栽培区に比べ約10cm上回る結果となった。

茎数では、土垂れの露地マルチ栽培区・ハウス栽培区・石川早生の露地マルチ栽培区が、5.0本に対し、石川早生ハウス栽培は4.6本と劣る結果となった。

収量は、両品種とも露地マルチ栽培区が優り、ハウス栽培区と比較すると石川早生約200kg/10a差、土垂れ約900kg/10a差と大きな差がみられた。

露地マルチ栽培区は、両品種に収量の大きな差は見られなかったが、ハウス栽培区では土垂れ1,328kg/10a石川早生2,206kg/10aと収量に大きな差が見られた。

親いも・子いも・孫いもの割合は、両品種とも大きな差は見られなかった。

曾孫いもは、露地マルチ栽培区には見られなかったが、ハウス栽培区に土垂れ2%、石川早生3%と僅かだが見られた。

## 8 考察

初期生育の良かったハウス栽培区が収量で劣ったのは、一般に里芋は他作物に比べ多灌を好むため、水分不足であったためと考えられる。

生育期間が短い北海道でいかに早く曾孫いもまで生育させ、定植・温度・土壌水分等の管理から収量に結びつけていくことが重要になってくると考えられる。